

## 鶴間和幸先生を送る

千葉 功

ついに鶴間和幸先生が定年で御退職される日を迎えてしまいました。鶴間先生と日常的に接する機会が少なくなることと思うと、淋しい気持ちでいっぱいです。

鶴間先生へ最初に御目にかかったのは、私が井上勲先生から御声をかけていただいて、史学科の非常勤講師を務めた二〇〇五〜一〇年度のたある四月の非常勤講師歓迎会の場かと思えます。その頃は毎年、都内や横浜の中華料理店で非常勤講師歓迎会が開かれて、おいしい中華料理が食べられると私は毎年参加するのを楽しみにしていました。その会に先生はいつも中国産の高価なお酒を持ち込まれまして（あるときは竹の香りのするお酒もあったか）と記憶しております（意地汚くもよくお酒を飲んだ私はもちろん鶴間先生のお酒もがぶ飲みし、鶴間先生からは呆れられたかと思えます）。

また、ある年の学年末試験では、私の科目「日本史特殊講義」に、先生が監督補助に入られることもありまして。そのとき、これももう時効だから申し上げますが、学習院大学史学科独特の手書きのため分厚い卒業論文を紺色のトートバックに入れてらっしゃるのを拝

見して、学習院の先生は常に卒論を持ち歩くなどたいへんだなと思つたものです。

それが、二〇一一年四月からは先生と同僚となりました。先生は新入りを、温かくかつ優しく見守られます。たとえば、私にとって最初の卒論読みと口述試験に臨む二〇一二年一月のこと、私はやはり方もわからなかったこともあって卒論に赤字で書き込みをしてしまったのですが、鶴間先生からは、学習院では学生へ卒論を返却することを考えて、鉛筆で書き込むことになっていると御指導がありました。恥ずかしく、恐縮しきりの思い出です。

さらに、これも時効なので、白状します。同じ二〇一二年一月のこと、言い訳をしますと睡眠時間を削りながら卒論を読んでいたためでしょうか、学校のある目白駅へ向かう山手線の車中で、いねむりをしてしまったことがありました。どうやら、途中の新宿駅から乗り込まれたのでしょうか、目白駅で眼を覚ますと、目の前には先生がいちゃいます。先生曰く、君はカバンを網棚の上に置いているようだが、今の時期から言ってカバンには卒論が入っているに

違いない。よって、カバンが他人に盗まれないように、僕が見張っていたんだよ。実は、史学科では手書きの、この世に一つしかない卒論をローテーションでまわすので、卒論をなくしたら始末書どころの話ではないのですが、事の重大さにも気づかない新人りを優しく諭されたのが先生だったのです。

そのように慈父のような、いや中国の大人たいじんのような温かいまなざしで見守ってくださった鶴間先生ですが、思い起こすと、先生との間にはいつも楽しいお酒があったかと思えます。お酒のつきあいのよいことだけが自慢の私は、学習院へ着任してからのたった一〇年だけでも、先生とはかなりの回数の酒席を御一緒させていただきました。それは、単に私が酒好きだったからだけではなく、先生のお酒が非常にあかるい、楽しいものだったからだと思います。先生のお退職後は回数が減るかもしれませんが、どこへでも馳せ参じますので、酒席を御一緒させていただくことを祈念しております。